# 怒りたかまる職場

五分会（四山）　森　のぼる

## 三井よ、おれたちに『生活苦ば、棚上げしとけ』とでも言うのか

月当たり個人能率が百トンを超える炭鉱は、世界中でもざらには存在しない。三池炭鉱はそれだけに驚異的だと言える能率を誇る炭鉱である。それを支えているのは労働者である。

汗みどろで働く労働者にとって、今回の三井資本の一方的な賃上げ分不払いの強行は、あまりにもひどすぎる攻撃である。三井資本は、まじめに働く労働者に「生活苦も棚上げしとけ！」とでも言うのだろうか。

### 『食うにも困る賃金』のわずかな支えである

八二春闘は一方四百四十四円、昨年を下まわる回答で妥結したが、この数年石炭資本の〝赤字宣伝〟に今年も屈したのである。

なるほど今日の石炭資本は、政府からの助成なくして経営できないことは誰でも知っている。しかし、それは永年にわたる日本の政治、経済上の体制的な問題であり、労働者にその責任はない。むしろ「経営上のほとんどは税金で、もうけのすべては資本の懐に」をもくろむ私企業体制が、本質的に克服できない問題点であり、責任でもある。

この責任をすべて労働者の犠牲で乗り越え、くぐり抜けようとする石炭資本と自民党政府の策動を粉砕しないかぎり、われわれ労働者にとってもまた、真の解決を見出すことができないものである。石炭産業の国営化（公社化）の方向を基本的な要求としてかかげているのは、まさにこれである。

いずれにしても、赤字だろうが黒字だろうが、汗まみれ、泥まみれになって、地底で働き続ける労働者。ほんのわずかなベルトコンベアの停止に気をくばり、まるで奴隷でも働かせているような、鉱長室からの冷い無線監視の中での労働。職種によっては常態化した強制残業の中で、必死に働いている労働者に一体どんな責任があるというのだろうか。

貯炭があれば赤字。ひと昔前、むちゃくちゃな大儲けを急ぎ、莫大な利潤をむさぼりとったあとにできた鉱害の補償費まで、労働者に責任転嫁させられたのではたまったものではない。

### 労働者犠牲の「赤字べらし」は三井のエゴイズムだ

三井資本は、これまでの歴史をひもとけばわかるように、経営の失敗や、再建のすべてを労働者の犠牲でくぐり抜けてきた。特には首を切り、時には大幅な労働条件の切り下げを強行してきたのである。

三池闘争といわれた、あの三十五年の争議はまさにその代表的なものであり、結果的には労働者が分裂させられ、三川鉱炭塵大爆発などの悲劇を作りだしたのである。

最近でも社宅料金徴集や、定着奨励金の廃止や特定休日を自由行使の名目で事実上取り上げ、生産増強を意図する等がそれである。

本来企業にとって、その利潤のすべてを作り出す労働者は、最も大切にされなければならないはずのものである。しかし三井は労働者を「生かさず、殺さず」のぎりぎりのところで、生活させ、働かせ、そして肥え太ってきたのである。

### 労働者の分裂・分断は資本の「喜」労働者の「悲」だ

三池闘争の中で、三井資本の手によって労働組合は分裂させられた。新労組の「平和協定」は、その象徴的な副産物である。この二十年間、この「平和」の美名にかくされたストライキ禁止の会社と新労組の約束ごとが、三池炭鉱はもとより、全国の炭鉱労働者と家族の最大のガンとなっている。

「平和協定」という手かせ足かせが、能率は日本一でも賃金・労働条件は中小炭鉱以下という厳しい内容の〝三池炭鉱〟にさせているのも事実である。

今回の「賃上げ分棚上げ」攻撃も、事実上北海道の友山（青別・砂川）の赤字ヤマの口を封じ、「平和協定」を最大限悪用しても、三池新労組の労働者が「怒れぬ、闘えぬ、ストが打てぬ」ことを前提に強行されたことは明らかである。

「食うにも困る賃金」のみじめさに、さらに来年の三月までわずか一方当たり四百四十四円の賃上げ分も不払いにされ、またしても今年一年嗜さとみじめさと隣り合わせに暮らさねならぬ。

三池炭鉱の労働者に、いま求められていることはほかでもない。労働者の力を強めることである。自らの生活向上をはかるために、一人ひとりの労働者の力で闘うことのできる労働組合を作ることである。

そして人間として、労働者として、譲ることのできない「命と権利」を確実に守ることのできる労働組合を作ることである。

## ワスカラン南峰に挑む

### 西島正司さん（6分会・四山）

### アンデス登山隊の一員として

西島正司さん（六分会・四山）

西島正司さん（六分会・四山）は、七月中旬からおよそ一カ月間の予定でペルーのアンデス山脈ブランカ山群のワスカラン南峰（標高六、七六八メートル）に挑戦します。

この登山隊（勝田清一隊長・東京）は六人編成で大牟田から三人が参加します。全国組織の勤労者山岳会の活動を通じて知り合った仲間で、西島さんは現在大牟田ハイキングクラブのメンバーです。

西島さんはすでに二十年の登山歴があり、このほどヒマラヤのラムジュン・ヒマール（六、九八三メートル）の登頂に成功した、同じ職場の吉野和記さんらと、ヒマラヤに挑したこともあるベテラン登山家です。

こんどの登山の中で、現地リマ市の子供たちや、福岡県人会などとの交流も計画しており、児童画や学用品の提供を呼びかけています。

阿蘇松が尾谷の氷漠を登る西島さん

## 三池のことが心残り

### 北岡さんからお便り

前略　亡夫、隆の死去に際しましては、皆さま方のご厚情ただただうれしく存じました。心からお礼申し上げます。

「光陰矢のごとし」とか申しますが、主人が亡くなりまして早や三十五日が過ぎました。月日が過ぎるのとは逆に、さびしさが心にしみるこのごろでございますが、三池で皆さまと共に過ごした日々のことが走馬灯のように思い出されます。

二十年前病いに倒れ、皆さま方の暖い支えで元気になり、千葉の方へ移り治療を続け、眼底出血で四回も入退院をくり返しながらも、子供たちが大きくなるまではと、なんとか頑張っていました。常日頃血圧も高く、自分なりに一生懸命だったと思いますが、ただ皆さま方のご厚情におこたえできずに、この世を去るのが残念なことだったと思われてなりません。

三池の皆さま、不知火会の皆さまの力強い友情には、近所の人たちも驚いておられました。生前の隆へのご厚情に感謝申し上げると共に、こんごともよろしくお願いいたします。

皆さま方も健康に留意されてますますご活躍くださるようお祈りいたします。

×

お便りをいただいた北岡ツイ子さん（元副組合長北岡隆さんの奥さん）は、千葉県船橋市二和東五の三九の五、にお住いです。

## 【短信】

### 荒地評囲碁大会で入賞

六月六日荒尾地評主催の囲碁・将棋大会が行なわれ、囲碁の部に出場した次の三氏が入賞しました。

A級二位　金子八郎さん（OB）
B級優勝　沖克太郎さん（23分会）
B級三位　井上文男さん（23分会）

### 平田憲二さんが死去

六月八日早朝、大牟田市立病院に入院加療中の平田憲二さん（退職者）が転移性ガンのため急逝されました。葬儀は九日でした。

心から哀悼の意を表し、ご冥福をお祈りします。なお平田さんは執行委員（三川指導部長）を二期つとめられました。自宅は大牟田市萩尾町一丁目一九九。

### 故・高口さんの遺族からカンパ

五月十四日死去された故・高口哲雄さんの遺族から、このほどご丁重なお礼状とともに、組合にカンパをいただきました。お礼を申しあげ、ご冥福をお祈りします。

## 釣りキチ余談　連載第七回

### 一に場所 二餌 三腕の巻

十九分会（三川）　石田　鈍竿

〝ピシッ〟
〝グウーッ〟

体ごと持って行かれそうな強い引きに、俺の前を流していた釣り人が、うらめしそうにこちらを見ているのを、体全体で感じる。それが一度ならず二度、三度となると、俺の方では何だか相手に気の毒な気持になってくるから不思議である。目の前でこんなでは、彼が頭にくるのは当然であろう。

「よう当たりよるですなア。地元ん人じゃなかごたるが。餌は何ば使いよるとな……」

俺のそばに来て、ぶっきら棒に話しかけてきた。いらいらした表情である。

「大虫ば使いよっとですたい」

彼はけげんそうな顔で、俺の腰に下げている餌箱に眼を移した。

その日は、多比良港堤防の干潮釣りから夜中まで釣ってみようと思いたち、釣行したときのことである。

梅雨明けで、日中は暑気の厳しい毎日であるが、堤防での夜釣りは結構海風で涼しく、釣り人のほかに地元の涼客でにぎわっていた。

「おたくは地元の人でっしょ良か釣り場ば持っとるですなア。荒尾だけん、毎日というわけにはいかんとですたい。ところで、おたくの餌は何ですか」

「いっちょん変わらん大虫ですたい。同じ餌で、こげん違うとはおかしかですな、ちょっと見せてくれんですか」

という彼に、気持よく餌箱を開けて見せた。

「ワアー、この大虫は生きとる。元気のようして光っとるじゃなかですか」

「冗談じゃなかですばい、死んどる虫が使いものになるですか。掘りたてのホヤホヤですよ」

興味があるので、彼の餌箱をのぞくと、ほとんどが艶を失ない、動かぬ大虫であった。

いくら魚影が濃いとはいっても、指でつまむと千切れるような大虫では、魚の奴も食指が動かぬだろう。この地方には大虫が少ないのか、昨夜の残りを持ってきたのか知らないが、それにしてもお粗末すぎるのである。

「これば使わんですか、余るごて持ってきとるですけん」

ひとつかみ渡した虫で流した彼の竿が、〝グーン〟と見事につの字に曲がるのを見届けてから、俺は余裕をもって竿を伸ばした。

一場所　二えさ　三に腕

釣りばするなら頭にたたき込んどけ、といっていた師匠の言葉が、昨日のことのように思い出された。